

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】上 英明

【所属】(助成決定時) 神奈川大学

【研究題目】 冷戦後の移民危機と米国社会の変容—キューバとハイチの事例を中心に

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、現在のアメリカ合衆国(以下、アメリカ)が抱える移民問題への理解を目的に、冷戦後の移民危機とそれに伴うアメリカ社会の変容を問うものである。そもそも「移民国家」を自負してきた第二次世界大戦後のアメリカは、すでに冷戦期において多種多様な人種・民族の集団を受け入れ、その文化的多様性を豊かにする一方、特に第三世界を出自とする非白人移民の流入の増加を背景に、草の根の反移民運動が活性化するという側面も併せ持っていた。とりわけ、この移民をめぐる言説と行動の矛盾は、冷戦後の移民危機において増幅し、ついにはトランプ政権の誕生を導いた。本研究は、冷戦後の移民危機がどのようにアメリカ社会の変容を促してきたのかを分析するため、1990年代初頭のキューバとハイチの事例に着目し、冷戦後の「アメリカと世界」の関係について、新たな視点を提示することを目指す。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究が注目するこの二つの移民危機については、米国政府の史料の開示が近年において進んでいる。クリントン大統領図書館のデジタル・ライブラリーでは、すでに数千枚の元機密史料が開示され、日本からアクセスすることができる。したがって、本研究では、まずこうした史料の読解を進めることにした。

加えて、本研究が重視したのは、ハイチ人移民、およびキューバ人移民が押し寄せたフロリダ州の史料である。そこでは移民受け入れ支持派と反対派の双方から寄せられた陳情の内容を確認することが可能であり、移民危機に直面した際のアメリカ社会の反応を追う上で貴重な情報を提供するものとなる。したがって、当初は、2週間ほどのフロリダ州での滞在調査を計画した。

ところが、世界的な新型コロナウイルス感染危機の勃発により、上記の計画は断念せざるを得なくなった。その一方で、感染危機を理由とする米国外の研究者への特別措置として、当初予定していたフロリダ州の史料館(フロリダ大学)からは大量の史料を無償で受けることが可能になり、思わぬ収穫となった。

これを受け、研究のさらなる拡大を目指し、調査期間の延長をお願いした上で、ニューヨーク州のチャールズ・ランヘル・センターにおける現地調査を計画した。同センターは、1990年代の黒人議員団の中でも最有力議員と目され、キューバやハイチの移民危機においても非常に重要な役割を担っていたチャールズ・ランヘル氏の史料を保管しており、当時の米国社会の反応だけでなく、米国政府の意思決定を知る上でも不可欠だと判断した。

同センターでの史料調査は感染危機の継続や史料館の改修工事などが重なり、難航を余儀なくされた。しかし、最終的には研究機関の再延長をお認めくださった貴財団の格別のご厚意、また史料調査の代行を担ってくださった現地の研究協力者の助力を頂き、上記の史料の入手に成功した。

【結論・考察】(400字程度)

収集した史料の量が当初の予定を大きく上回ったことから、新たに得られた知見をまとめるまでには、あと数年はかかるものと考えている。とはいえ、これまで読むことができた一部の史料からは、冷戦終結直後

の時点で、移民政策をめぐる激烈な論争と政治抗争が米国社会の中で展開されていたことが裏付けられている。これまでも共産主義国から逃げてきたという理由だけでキューバ人移民を優遇する冷戦期以来の政策への限界は指摘されていたが、大統領選挙の最重要州であるフロリダを重視するクリントン政権の内部でさえ、1966年キューバ人調整法の時代遅れを指摘する声があった。また、単純に移民規制を求める声だけでなく、より肌の色が濃いとされるハイチ人難民への人種差別を疑うチャールズ・ランヘル氏ら、黒人議員団の声も想定以上に重要であった。一方、フロリダの史料からは、反共・民主化のシンボルを武器に特別待遇の死守を目指すキューバ人移民団体、それと結託するフロリダ州の議員たちが暗躍している様子が見てとれた。したがって、今後もこうした米国社会内の各勢力のせめぎ合いを様々な史料の比較検証を通して具に追うことが重要であると考えている。

今後も貴財団への感謝の気持ちを忘れることなく研究を進め、最終的には国内外に向けて発信できるレベルの学術成果を出すことを目指したい。